LESSON 06 - 01　口上、プログラム、自年譜

●口上

日本洋画史における1913年
ヘタうまの源流としての反官フォーヴ

　西欧美術における1913年は主情主義から主知主義への転換点であり、ドイツの表現主義グループ「ブリュッケ」の解散と、カンディンスキー、モンドリアン、マレーヴィチらの抽象絵画の創始が象徴的である。では日本の1913年（大正2年）はどうであろうか？　萬鉄五郎が「裸体美人」を発表し、岸田劉生、斎藤與里らが「日本的フォーヴ」の魁となったフュウザン会を結成したのが1912年で、翌1913年は同会解散の年に当たる。急進的画家たちによる文展第二部（洋画部）を二科制とする建白書の提出は1913年だが、当局に拒否され在野団体として二科会が設立されたのは翌1914年である。「1913年は情から知への転換点」という仮説はひとまず措き、反官要素を併せ持つ主情主義としての「日本的フォーヴ」の最初の高まりとして1913年前後の時代をとらえるならば、そういえば私にも言いたいことがあった。
　私は歴史法則主義の立場であり、循環史観論者である。日本現代美術史としては批判的に語られがちな1950年代後半の「アンフォルメル旋風」と、サブカルチュア文脈なため日本現代美術史には組み入れられていない1980年代前半の「ヘタうま」は、反アカデミズム的主情主義エネルギーの噴出として同一直線上に並んでいる。さらにそれらの源流として、1910年代の「日本的フォーヴ」を考えるのだ。西洋受容と模倣の問題、東洋アイデンティティと南画と書画とグラフィック、繰り返される「ヘタ」と「生」の論争ほか、さまざまなテーマが見えてくる。
　もともとこのLESSONという会では、「1913年という時代をよりリアルに感じるため、1913年以降のことには触れない」を原則としていたとのこと。しかし主催者側のほうから私に、「中ザワさんのときにはこの原則を破ろうと思っています」と申し出てくださった。ご高配に感謝します。2008年現在、美術界はヘタうまの対極であるマニエリスムの全盛期だが、であるからこそ、やがて到来するであろう第四の「反官フォーヴ＝ヘタうま」を占いたい。

●プログラム
第一部　概論：歴史法則主義の立場から「日本的フォーヴ〜アンフォルメル〜ヘタうま」を連結する
第二部　詳論：日本洋画史における1913年を「フュウザン会解散、二科制建白書、新南画動向」からヘイゲイする
第三部　雑論：「ヘタと生」「帝国主義と東洋」「梅原とホッパー」「新旧論争と色彩派」「情から知、時代／作家」他

●自年譜
中ザワヒデキ（なかざわ・ひでき）
美術家。1963年新潟生まれ。千葉大学医学部卒。1983-89年、アクリル絵画。1990-96年、バカCG。1997-2005年、方法絵画。2006年以降、本格絵画。2000年1月1日、詩人松井茂、音楽家足立智美の立ち会いで「方法主義宣言」を発表。著書「近代美術史テキスト」「西洋画人列伝」「現代美術史日本篇」。特許「三次元グラフィックス編集装置」「造形装置および方法」。CD「中ザワヒデキ音楽作品集」。

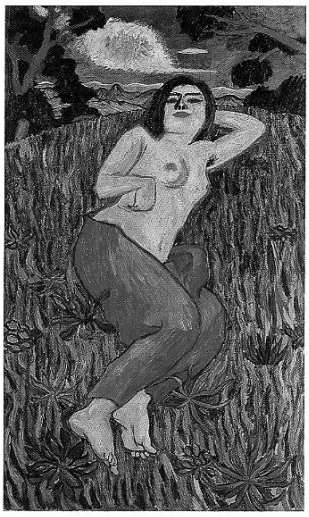
図33　萬鉄五郎「裸体美人」 1912年
東京国立近代美術館

紀美術の顔ぶれが、前衛美術を含めほぼすべて出揃っていたのである。これらの情報はほとんど間を置かず日本に伝えられ敏感に受け止められた。
　明治四三年（一九一〇）に創刊された雑誌『白樺』に毎号掲載される色刷り図版は、若い美術志望者に大きな刺激を与えた。一九一二年の九〇頁に及ぶファン・ゴッホ特集号はその最たるものであった。彫刻家で詩人の高村光太郎が、雑誌『スバル』に発表した「緑色の太陽」というエッセイで、「人が〝緑色の太陽〟を画いても僕はそれを非なりとはいわない」と、表現主義への共感を示したのも一九一〇年のことである。
　萬鉄五郎（一八八五―一九二七）が一九一二年、東京美術学校の卒業制作として「裸体美人」［図33］を発表したとき、教官や同僚は皆呆気にとられた。腰巻一つの裸女が、草原に寝そべって〝ヘイゲイしている図〟と後に自らが回想しているような型破りの絵だったからである。岩手生まれのかれが、日本という辺境の風土性を逆手にとって挑んだこの大胆な表現は、洋画家の先輩たちが西洋絵画と取り組む生真面目さを〝ヘイゲイ〟しているようにも見える。日本の前衛美術運動の突破口はこの作品によって開かれたといわれる。

辻惟雄「日本美術の歴史」pp.378-379　＜萬鉄五郎「裸体美人」1912＞「これはゴッホやマチスの感化のあるもので半裸の女が赤い布を巻いて新緑の草原に寝ころんでヘイゲイしている図」

経緯…メンバーのはがさんが僕の回顧展を見て、作風が主情主義から主知主義へ転換しているように見えたことが、打診いただいた理由のひとつ（らしい）。

2008年12月13日(土)14-19時

| | |
|---|---|
| 始まりのあいさつ | 14:00-14:05 |
| 第一部 | 14:05-15:15 |
| 休憩（ドリンクタイム） | 15:15-15:30 |
| 第二部 | 15:30-16:40 |
| 休憩（ダンランタイム） | 16:40-16:50 |
| 第三部 | 16:50-18:00 |
| 食事 | 18:00-18:50 |
| 終わりの記念撮影 | 18:50-19:00 |